



教育実習からの気づきを踏まえた小学校英語授業の 検討：学生の学びに着目して

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石森, 広美 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/0002000480 |

教育実習からの気づきを踏まえた小学校英語授業の検討

— 学生の学びに着目して —

A Practical Study of Elementary School English Classes Based on Teaching Practicum:
Focusing on a University Seminar for Future Teachers

石 森 広 美*

概 要

近年、文部科学省により小学校英語教育改革が進められ、小学校英語教員の養成が喫緊の課題となっている。しかし、一か月間にわたる教育実習では国語や算数の指導力向上が優先される傾向にあり、英語指導法を深く考える機会が不足している。本稿では、小学校教員養成課程4年次後期の「教職実践演習」における教科別演習（英語）に焦点を当て、学生の教育実習経験を基に小学校英語の授業案を検討するとともに、学生の省察に基づく学びを探究する。具体的な検討対象は、学生の発言や振り返り、問題提起、それに対応する指導案や模擬授業の内容等である。教科別演習における英語グループ内でのディスカッションを通じて、経験と知識の乏しい学生が互いの実習経験を比較・共有し、相互検討により指導力向上を図った。その結果、問題意識の共有とその対応策の考察から、授業計画や指導力に関する知識や理解を深め、今後の教育実践に向けた示唆を得ることができた。

1. はじめに

1.1 背景と本実践研究の位置づけ

急速に進展するグローバル化への対応策として、文部科学省は小学校の外国語教育の改革を行い、2020年4月から中学年での外国語活動、高学年での外国語科が全面実施された。学習指導要領に明示された、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の3つの視点のうち、とりわけ「どのように学ぶか」では、「主体的・対話的で深い学び」を促進する授業改善が求められている。すなわち、学習への動機付け等につなげる「深い学び」が実現できているか、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」の過程が実現できているか、学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって次につなげる、「主体的な学び」の過程が実現できているかどうか、が問われている。児童生徒が自ら学びたくなる課題設定や学びに向かう力の見取り方については、実践者の共通の悩みであり（安野・高草木、2022）、これらは教員養成課程教育の視座からも、実践的課題として留意しておくべき事項である。また、教科としての小学校外国語の導入以降、運用能力の育成が重点化されたことにより、異文化への寛容な態度やコミュニケーションへの積極的な姿勢形成等、従来大切にされてきた目的が後景に追いやられるという懸念も指摘されており（寺沢、2021）、あらためて小学校外国語教育の目的を再考する必要性が提起される。

*北海道教育大学函館校（英語科教育・国際理解教育研究室）

教員養成課程教育に視線を向ければ、小学校外国語の教科化に伴い、小学校教員志望者は指導法に加えて、外国語に関する専門事項を身につけることが求められている。いわゆる教員養成の「コアカリキュラム」（「小学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム」）である（文部科学省、2017a）。2019年度から小学校教員養成課程で外国語（英語）が必修となり、現在、多くの教員養成系大学では2年次に教科の指導法や専門的事項の授業を開講している。小学校外国語教育を担う教員養成の重要性についてはこれまで随所で主張されてきたが（e.g., 卯城、2018；金森、2019ほか）、小学校外国語が教科化されて以降、教員養成課程においても小学校外国語を担うことのできる人材育成の重要性が認識され、多様に教育が行われている（安達、2022；小柴、2021ほか）。

コアカリキュラムに即した養成課程教育の修了生が教壇に立つようになって、まだ間もない。よって、教育現場にもたらず実質的成果については今後の実践研究が待たれるものの、現在、教員養成課程において資質能力を向上させるために展開される教育内容の実例を振り返り、学修に従事する学生の省察や学びの軌跡の一端を披歴し記録に残すことは、今後の小学校外国語（英語）教育を展望する上で、意義のあることと考えられる。

なお、外国語科においては英語の履修が原則とされていることから（文部科学省、2017b）、教員養成課程における教科又は教職に関する科目としての実際の「初等外国語指導法」や「初等外国語」における「外国語」は、「英語」が取り扱われている。したがって、本稿においても小学校英語と表記することとする。

1.2 本実践研究の目的

上記を踏まえ、本実践研究では、小学校教員養成課程の4年次後期履修科目「教職実践演習」に着目し、2023年度10月下旬から12月初旬にかけて実施された教科別演習およびその総括としての教科全体交流を検討の対象とする。具体的には、教育実習経験からの気づきに基づく小学校英語授業の提案内容と学生の学びの内実を探究し、実践的示唆を得ることを目的とする。

「教職実践演習」は教育職員免許状取得科目の一つであり、教職実践に関する科目として位置づけられている。文部科学省（2018）は、以下のように説明する（下線部は筆者）。

教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

上記の説明からは、当該科目が教員養成課程で学ぶ「学生」と、卒業後に教職に就く「教員」という二つの異なる次元を接続し、学生から教員への円滑なトランジットをサポートする科目としての機能を付帯していることが理解できる。したがって、より実践的な文脈に基づいて課題を検討し、実践志向の具体的知見を得ることが求められている。

本稿では、「教職実践演習」において、学生が自身の教育実習での経験からの気づきに基づいて考察し作成した英語の授業案を取り上げ、その背景や特質を描出しつつ、間もなく教職に就こうとする

学生の学びを探究する。具体的には、「教職実践演習」の英語グループでの協議における学生の発言と振り返りの記述内容、学生から提起された課題とそれに対応する指導案と模擬授業の内容等、多層的な質的資料を分析の対象とし、小学校英語授業の方途と学生の学びについて総合的に検討する。

2. 小学校英語授業についての課題意識

2.1 教育実習における英語授業の経験

勤務校の教職実践演習では15回の授業のうち、第3回から第6回の計4回は4教科¹⁾の小グループに分かれ、当該科目について自身の教育実習の振り返りに基づきながらグループ討議を展開し、授業案の相互検討を行う。その成果を第7回目の教科全体交流で共有する。「英語」分野には履修学生43名のうち10名が参加した。学生の小学校英語の教育実践経験は、以下の通りである（表1）。

表1 学生の教育実習経験

| 学生 | 実習先（配属学年） | 教育実習での英語授業実践経験等の有無 |
|----|----------------------|--|
| A | 小学校（3年生） | 3年生の英語授業を参観・英語授業実践経験なし |
| B | 小学校（3年生） | 3年生の英語授業を参観・英語授業実践経験なし |
| C | 小学校（2学年） | 4年生の英語授業を参観・英語授業実践経験なし |
| D | 小学校（6年生） | 6年生の英語授業を参観・英語授業実践経験なし |
| E | 小学校（3年生） | 3年生の英語授業を参観・英語授業1コマ実践経験 |
| F | 小学校（5年生） | 5年生の英語授業を参観・英語授業1コマ実践経験 |
| G | 小学校（5年生） | 5年生の英語授業を参観・英語授業1コマ実践経験 |
| H | 小学校（5年生） | 5年生の英語授業を参観・英語授業1コマ実践経験 |
| I | 小学校（1年生） 中学校（3年生） | 中学年の英語授業を参観・英語授業実践経験なし 3年生の英語授業を数時間実践経験 |
| J | 小学校（5年生） 中学校（3年生） | 5年生の英語授業を数時間実践経験 3年生の英語授業を数時間実践経験 |

一か月間にわたる小学校での教育実習では、国語と算数の指導力向上に注力する傾向にある。学生が希望すれば一回程度英語の授業実践ができることはあるものの、「研究授業」「課題授業」で英語を扱うことはほとんどないのが実状である。また、英語はカリキュラム上全学年に配置されているわけではなく、実習の配属学年が低学年であった場合、当該学年に特段の依頼をしない限りは、英語の授業参観の機会を得ることも難しい。高学年に配属されても、英語専科教員が授業を担当する学校では、実習生が授業をもたせてもらえないケースもある（表1、学生Dが該当）。幸運にも上記10名は参観する機会があったものの、実習期間中に英語授業を1時限でも実践した学生は、半数の5名に留まる。学生の間には、経験値の有無に起因する課題意識に差異が生じる可能性がある。そうしたなか、上記学生が混合しそれぞれの実習における気づきを共有し協働的に省察に取り組むことは、卒業後の教職生活の始動につながる重要な意味をもつ。加えて、実習校の英語授業を参観した際の授業の進め方や指導法、児童の反応等、観察から得た所感や気づきもまた、授業のあり方を検討する際の貴重な材料となる。また、上記10名の中には、初等に加えて中等の外国語（英語）免許取得を目指す学生が2名（表1、学生I・J）存在し、中学校の教育実習経験も有していたことから、小・中の異なる教育段

階での配慮事項や、両校種の接続を視野に入れた上での論点も議論の俎上に上がったことは、義務教育段階における英語教育全体を見通す意味で有益であった。

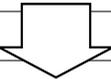
2.2 教育実習における英語授業への課題意識と改善の方向性

4回にわたる教科毎グループ討議では、次の点について順次話し合いがなされた。

- (1) [指導上の課題抽出] 教育実習の振り返りに基づく自らの指導力と実践上の課題についてのグループ討議
- (2) [授業案の準備] 課題解決のための授業案についてのグループ討議と授業構想
- (3) [授業案の検討・模擬授業準備] 指導案の相互検討と模擬授業準備
- (4) [授業の妥当性・評価] 模擬授業実施と評価の分析、全体交流での発表準備

既述の通り、一様ではない学生の経験はグループ討議の中で共有され、相互にコメントを出し合うことで省察を深めた。その結果、小学校英語授業における共通の課題意識が抽出され、授業改善の方向性として次のように総意が整理された（表2）。

表2 学生の教育実習の経験に基づいた小学校英語授業における課題と改善の方向性

| |
|--|
| <p>【英語の授業で目指したいこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リアルな目的・場面・状況を設定し、児童に外国語を使う必然性をもたせる。 ・児童自身が自分の気持ちを込めて、実際の場面で活用できる言語活動を行う。 |
|  |
| <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定型的な暗記に基づく、機械的な単語や文法練習。 ・リアルなコミュニケーションを想像しにくい授業。 ・ALTを十分に活用できていない現状。 ・外国語と異文化理解の関連づけの弱さ。・教科横断的な授業に発展していない点。 |
| <p>【改善の方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自他の本当の気持ちを含める。 <ul style="list-style-type: none"> →表現を活用できる場面を自分事として想像できる。 ・ALTの先生に自分や友達のことを表現し伝える。 <ul style="list-style-type: none"> →英語を使う必然性を与える。 ・教科書の内容を活用し、異文化や国際理解の視点を加える。 <ul style="list-style-type: none"> →英語学習の動機付けにつなげる。 ・他教科と関連させる。 <ul style="list-style-type: none"> →児童自身が生活の中で学びを活用できることに気づき、主体的な学びを深められる。 |

協議のプロセスにおいては、学生の実体験に基づく多様な見解や問題意識が提起された。上記の傍証となる学生のコメント（例）を以下に示す。コメントは授業後に提出された振り返りシートからの抜粋である（アルファベットは表1に対応、原文のまま、以下同様）。

[授業参観からの学びを共有した学生：練習の仕方の工夫に言及]

「(参観した英語の授業では) 文法の反復練習の中で英語に触れる機会は多くあったが、子どもたちが意味を理解して練習しているのかどうか疑問があった。自分自身も反復練習に混ざった時、トマトが嫌いな児童にDo you like tomatoes?と聞いてみたところ、元気よくYes, I do!と返ってきたことがあった。反復練習が児童の力になっているとは想像したが、児童の理解にはつながっていないかもしれないと感じるきっかけになった。英語の使用量が増えたとしても、意味を理解せず作業のような実践になってしまえば、意義が薄れてしまう。どのような練習や工夫をするべきなのか検討しなければならないと考えた。」(学生B)

[授業実践経験のある学生の気づき：場面設定とコミュニケーション活動の重要性に言及]

「自分の授業では“I can ~” “I can't ~” “Can you ~?” の表現を、型にはめるよう何回も繰り返し言う練習をし、その授業で覚えさせたいことを定着させようとした。しかし、うまく指導できず、声を出す子どもは少なかった。また、型にはめた学習しか行っていなかったのも、実際にそれがどのような意味なのか、どのような場面で活用されるのか児童が理解することは難しかったように感じる。教科書に載っている例文、実在しない人物のみを取り上げるのではなく、日常生活で使用できるように、身近な場面を設定することが課題として挙げられる。表現の仕方を覚えさせることと、その表現を使うことを、どう繋げていくのかが課題である。(中略)

話し合いの中で、児童は意味を理解せず公式のように英語の文章を覚えていて、実際の場面で使えるというところまでは達していないという課題が挙げられた。そこで、実際の場面でも使えるようにするために、教師のデモンストレーションを充実させることが重要だということが挙げられた。教科書に載っている文章を教師が読むだけでなく、例えば子どもが既知っている先生の情報(例えばDo you like ~の単元であれば、先生が実際に好きな物など)を使って例を示すことで、その文章の意味が理解しやすくなるのではないかと考える。

また、自分のことだけを英語で言うのではなく、友達のできることや好きなことなどを紹介する活動を行うと良いのではないかと指摘があった。自分で自分のことを紹介すると、思春期の恥ずかしさを感じる児童がいるということも考えられる。そのため、積極的に英語を使って話すという点でも、友達のことを紹介するという活動は効果的であり、リアルコミュニケーションにも繋がれると考える。またこの活動は、友達の新しい一面を発見でき、英語を通して友達の事を知れた、友達に自分のことについて英語を通して知ってもらえたという喜びにつながり、英語コミュニケーションの楽しさや英語に対する興味関心が高まるとも考える。

さらに、目的・場面・状況を明確に設定することが重要だと学んだ。教科書のことを繰り返し行うことは、コミュニケーションではなくコミュニケーションを行うための練習で準備段階である。それを実際の場面で使うことがコミュニケーションになるので、教師が実際の場面を設定することで、児童がどの場面で使うのかが分かり、現実感を持ちながら学習することができる。」(学生H)

[中学校で実習をした学生の気づき：単語や文法を覚えた後の活動が重要]

「(前略) リアルなコミュニケーション場面の設定がなければ、決められた文を何度も練習し、その授業では言えるようになったとしても、本当の場面では学んだ表現を使うことができなくなる可能性がある。しかし、単語や文法を覚えさせなければ英語を使えるようにはならない。したがって、単

語や文法を覚えた後の言語活動のあり方が重要である。(中略)

外国語の授業の際、リアルなコミュニケーションを取り入れるために、英語を使う目的や場面を設定し、単語や文法を覚えた後の活動を工夫することが重要であると学んだ。」(学生I)

[授業実践が多くあった学生の気づき：想像力を高め気持ちを込めることの必要性に言及]

「コミュニケーションで使えるような目的場面状況を設定することが重要だと実感した。学生の授業観察からは、文法の型にはめることだけで精一杯になってしまい、内容の理解すらもできていない状況にある児童がみられたとの報告があった。こうした問題を解決するためには、文法の型にはめた機械的な対話の練習だけではなく、その文法をいつどこで使用するかの想像ができるような提示や説明が必要だと考えられる。

また、今日の演習では、文法を使う場面での想像力を高めておくことの重要性を学んだ。私自身、文法の正解ばかりを追い求め、気持ちを添えて考えたことがなかった。国語の授業では当然のように登場人物の気持ちを考えるが、英語だけやらないというもおかしな話である。生活と密着させるためにも、まずは教師自身その感覚を研ぎ澄まし、より鮮明な感覚をもたせられるようにすることが大切だ。」(学生J)

[授業実践経験のある学生：異文化理解や国語等の他教科との連携を促す必要性に言及]

「外国語の授業は異文化理解を促す授業でもある。英語と国語(日本語)の授業を比較することで、子どもの英語への抵抗感を減らすことも有効ではないか、と話し合った。「時は金なり (Time is money.)」など諺も良い例かもしれない。また、普段英語の授業を楽しんでいる子どもこそ、他教科とのつながりや異文化理解の視点を授業で積極的に取り入れるべきだと思う。そうすることで、その子どもの楽しいという感覚を高めることにつながる。」(学生E)

ごく一部の抜粋ではあるが、上記学生の振り返りの記述は、実習での経験から互いに学び合い、課題を見つけ改善への方途を模索する様子を描画している。学生たちは平時の授業の一端を垣間見たり、一部を断片的に経験したりしたに過ぎない。ゆえに、そこから課題を普遍化することはリスクを孕む。他方、限られた経験を収集し組み合わせ、省察を深めるプロセスを経て、新たな学びや価値が生み出されることもまた事実である。

教職における教育活動やその困難性への挑戦についての共通理解を図ることは、教員同士の同僚性を確保するうえで重要な要素である。教職実践演習においては、4回の教科グループでの討議の後、全体交流授業が位置づけられており、教科グループ別で行ってきた、省察を反映させた授業構想と授業案の共有、模擬授業等の演習の成果を、異なる教科グループ間で発表する。そして、教科を越えて議論を深め、教職に必要な資質能力として有機的に統合することを目指す。以下に、学生の討議から創出された英語の指導案の一例を示す。

3. 授業案の構想と実践

3.1 授業構想

近年、外国語教育において異文化コミュニケーションの視点やグローバルで総合的な学びとの連携が

重視されてきており (Byram, 2021ほか)、CLIL (「内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning)」の略称) への注目度が高まっている (笹島, 2011; 笹島・山野, 2019; 渡部・池田・和泉, 2011)。授業案 (表3) では、CLILに高い関心を寄せる学生からの提案に基づき、その理念が反映されている。

CLILとは、言語と教科内容を同時並行で教授・学習することを目指した外国語教育の原理であり、初等教育段階から高等教育段階に至るまで、幅広い段階で様々な形態により実施可能である (Mehisto, Marsh & Frigols, 2009)。CLILのアプローチは多様に存在するが、最近では主に英語を通して何らかのテーマや教科内容を学ぶ学習形態をCLILと称する傾向が認められ、小学校英語教育においても活用する動きが活発化している (笹島・山野, 2019ほか)。

表3 省察から考案された指導案 (例)

5年生 Unit 4 5時間目

「ALTの先生に友達の職業を紹介しよう！」

Content (学習内容) 社会科、総合、SDGsとの統合を意識

| 時間 | Content (学習内容) | Communication (教師) | Communication (児童) | Cognition (思考) | Culture/ Community (文化理解/協学) |
|----|-------------------|---|--|--|------------------------------------|
| 2分 | 挨拶 | Good morning, everyone! How are you? Let's start English class! | Good morning! I'm fine. | 理解 (話を聞く) 意欲を喚起する。 | Class |
| 6分 | 前時の学習を振り返る。 | ○クイズを出題する。 First, Quiz time! Look at this picture. Who is he? Yes! He is a zookeeper. He can take care of animals! Next, who is he? That's right! He is a fisher! He can get fish! Finally, who is she? Great! She is a cook! She can cook Pizza! | Zookeeper! Fisher! Cook! | 推測 列挙 写真を見て、何を表しているか考える。 類推 職業と“can”(できること)の関係性を捉える。 | Class |
| 1分 | Review | ○前時の学習と本時の学習のつながりを意識させる。 「前は世界の町で働く人々について勉強したね。今日はみんなに職についてももらいます！クラスメイトがどんな仕事をしているのかインタビューして、ALTの先生に友達の職業を紹介しましょう！」 | | | |
| 1分 | Today's Goalの確認 | ○Let's check the today's goal! Let's speak★Ken先生に友達の職業を紹介しよう！ | 読み上げ | | |

| | | | | | |
|----|----------------------------------|---|---------------|-----------------------------------|-------|
| 7分 | Cardを受け取る。 | ○列ごとに異なる職業のカード、ワークシートを配る。(発音も確認) 「クラスみんなが付きたい職業のアンケートで票の多かったものを選びました」 ・Teacher ・Doctor ・Sports player ・Pilot ・Pâtissier ・Police officer ○First, I'll tell you about how to interview. (ALTの先生とロールプレイ) | | | |
| 3分 | インタビューの仕方を確認する。 | ★ここで情報の引き出し方を伝える。 A: Who are you? B: I'm -----. I can -----. How about you? ○Let's practice! 確認したインタビューの練習としてペアでインタビューしてもらう。 ★確認したインタビューの仕方をスクリーンに映しておく。 | Small Talkを聞く | | |
| 3分 | Activity 1 ペアでインタビューし合う。 | ○Let's interview! | 言語活動 | 理解 インタビューの仕方を理解する。 | Class |
| 6分 | Activity 2 全体でインタビュー内容を発表し合う。 | ○Let's introduce your friend! 児童に発表してもらう前に、先生が交流した児童の職業を紹介する。 Kotaro is a swimmer. He can swim fast! Thank you! | インタビューやり取り | 表現 相手に職業を尋ねたり、相手に自分の職業を伝えたりする。 | Pair |
| 7分 | Activity 3 ALTの先生に友達の職業を紹介する。 | | 発表 | 表現 友達の職業をALTの先生に伝える。 | Class |
| 4分 | (国際理解) | Please look at this picture. What is she doing? 「今日はみんなに職業の役割を与えて、職業についてもらったけど、世界には本当に働いている子どもたちがいます」 (児童労働についてふれ、学校で学ぶことの尊さを実感させる) | | 推測・理解 学校に行けず働く子どもの存在に気づく。 | Class |
| 5分 | 振り返り・まとめ | Reflection time 自己評価・ワークシート等 | | 評価 | Class |

※教育学部地域教育専攻(教職実践演習英語グループ)学生が作成



図1 模擬授業で扱った教科書の該当ページ
(東京書籍、NEW HORIZON Elementary English course 5)

表3の授業案においては、CLIL的要素として、職業選択の視点を提供するキャリア教育や社会科、あるいは教育を受けられない児童労働に従事する子どもの存在（国際理解、SDGs Goal 4）との関連が視程にあり、英語の授業を通して視野を拡大させ、児童の知的関心が喚起されることにより学習意欲の向上を図り、主体的で深い学びにつなげたいという意図がある。自己関連性や学びの必然性、真正性を高め、対話的な深い学びを実現するひとつの方法として、英語授業でCLILの要素を摂取するのも、一考であろう。

教科書のこの単元（図1）を選択した観点として、学生は次のように説明している。

- ・一つ目は、目的と場面の設定を明確に行う点です。児童たちに教科書に記載されている文章や単語を音読だけさせるのではなく、教師が目的と場面の設定を行うことで児童にその会話の内容を具体的にイメージさせます。これにより児童一人ひとりに外国語を使うことを自分事として置き換える「当事者意識」をもたせることができ、英語を用いることの楽しさや重要性を認識させることができると考えます。二つ目は、教師が授業を通じて雰囲気作りを行う点です。児童の発言や考えに対して、教師が外国語の返答を行うなどの「クラスルームイングリッシュ」や外国の様々な文化を学習する「異文化理解学習」の導入をすることで、クラス内に外国語の雰囲気が生まれ、子どもたちがワクワク感をもって学習できます。また、教師一人が英語を多用する授業が子どもたちにとっていい授業という訳ではないため、児童一人ひとりの外国語使用に対して寄り添う気持ちを持ち、児童の活動を支援することです。以上の二つを踏まえ、私たちのグループでは小学校5年生の教科書の「Over the Horizon世界の町で働く人々について考えよう」を教材として選択しました。（学生F）
- ・私たちのグループでは、前回の授業で「習ったことを活用し、自分で表現することができる授業」を作ることが課題であると考えた。また、子どもたちの興味関心を引き出すような内容であれば、英語で自分のことや友達のことについて、楽しんで表現ができると考え、教科横断的な授業を作ること目標とした。社会科、総合との関わりをもたせ、世界の人々の仕事から自分の町の人々の仕事に目を向けさせ、さらに子どもたちの将来を考える活動にもつなげることができる。このページの前段階では、can、can'tを学んでいることから、職業とそれらの表現を関連させた活動ができるのではないかと考えた。（学生I）

全体交流では、具体的な授業風景をイメージしやすくなるようなねらいのもと、学生がJTE役、ALT役、児童役を演じた模擬授業形式を用い、発表が行われた。



図2 職業カード

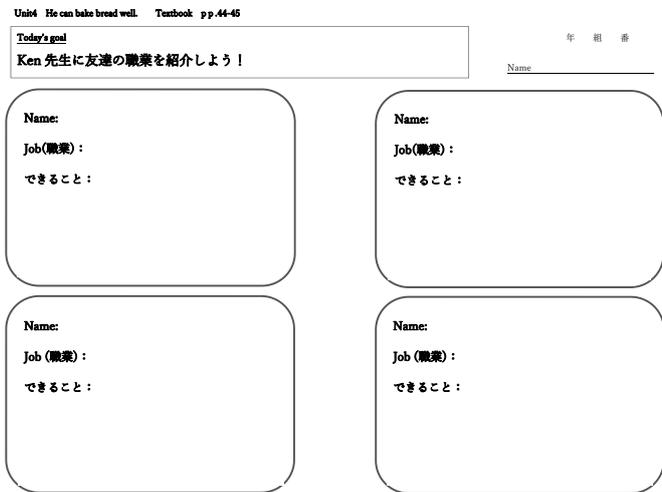


図3 ワークシート

※教育学部地域教育専攻（教職実践演習英語グループ）学生が作成

3.2 全体交流における模擬授業の実践

全体交流では、(1)各教科の特性に応じた学習活動の展開、(2)個に応じた指導の工夫、(3)意欲を高める工夫、のいずれかに言及し、演習の成果の蓄積を異なる教科グループで交流し、考察を深めることが企図されている。英語においては、(1)と(3)が焦点となった。(1)については、小学校外国語（英語）科の目標である、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することに貢献しうる授業の検討である。また、思考し判断したことを、外国語（英語）を用いて表現することの特質も考慮しなければならない。すなわち、どうしたら相手に自分の思いがより伝わるか、相手の思いをより理解できるかである。加えて、外国語（英語）学習が拓く新たな世界や異文化との出会いも知的好奇心を喚起するとの所望も包摂されている。この点は(3)の意欲向上にも連動する。これらの検討の結果、学生が協働で作成した授業案を用いた模擬授業の実演（表3）が、カード等（図2、3）やスライド（図4）を活用しながら行われた。



図4 使用したスライドの一部（例） ※教育学部地域教育専攻（教職実践演習英語グループ）学生が作成

3.3 授業案の評価と今後に向けた展望

教育実習の省察に基づくグループ討議において、学生たちは、「英語の授業で目指したいこと」として、「リアルな目的・場面・状況を設定し、児童に外国語を使う必然性をもたせる」とことと「児童

自身が自分の気持ちを込めて、実際の場面で活用できる言語活動を行うこと」の二点を提示した。それは、コミュニケーション能力育成の要諦となるものであり、また、その実現は児童がその後の英語学習に能動的に従事し、自律した学習者として成長していくことを助成する。教員側が子どもたちに現実的な文脈でのコミュニケーションを意識した積極的思考を促し、英語での自己表現や教室内で意味のあるやり取りを展開させることで、子どもたちは「思考・判断・表現」を具体化させることができる。本当に自分が考えたことや、思いや気持ちを表現するために使用した英語表現は、学習者自身に強く印象づけられ、その後の定着が期待できる。そして何より、自分の思いが伝わり相手に理解してもらったという経験は、達成感と自己肯定感を醸成し、次なるコミュニケーション意欲の向上に発展していく。

目的や場面、状況等に応じてコミュニケーションを行う力の養成が求められるなか（文部科学省、2017b）、本演習において具体的な単元で授業構想をしていく過程で、相手意識をもったリアルなコミュニケーションを体験させる点を重視した結果、状況設定に関して学生から次のような提案が出された。「児童の親の実際の職業を英語で書いてもらい、写真を見せながら “He is my father. He is a taxi driver.” のように本当のことを表現させたらどうか、児童の生活と密着させることができるのでは」との内容である。しかし、現在の家庭環境は様々であり、保護者の職業や働き方も多様化している。親の職業を他言するのをためらう児童もいると想像される。そうした児童の逡巡や複雑多様化する家庭の事情には、慎重な配慮が必要とされることから、学生側に再検討を要求した。その結果、親の職業には触れず、児童の将来就きたい職業をクラスでアンケート形式にて投票させ、その上位にランクした職業を選択し、児童にそのいずれかの職になりきらせ、「自分の職業」として捉えさせる設定へと変更された。

全体交流における模擬授業の後の質疑応答では、他教科グループの学生から、「単語が難しくないか」「（模擬授業では）クラスルームイングリッシュが積極的に使われていたが、理解がついていけない児童が出てくるのではないか」との危惧を含意する質問が示された。英語は他教科に比して、学習歴の影響がより大きいことが予測され、個人差の表出が見えやすい傾向にある。個々の学習者のレベルやニーズ、スタイルに合わせ、最も効果的な学習環境を提供する個に応じた指導や個別最適化の学びについては、今後教育現場においてますます顕在化する課題であると推察される。英語科においてもこの点への対応についてさらに検討を重ねる必要がある。「めあて」の明示、明確な場面設定、デモンストレーションや例示、ALTとの協働、ICTの効果的活用、表情やジェスチャー、声のトーン等、理解を補助する様々なストラテジーを駆使し、コミュニケーションへの意欲の向上と中学校・高等学校へと接続するために必須となる英語学習の充実化につなげていきたい。

4. 総括

以上、本稿では、小学校教員養成課程の4年次教職科目「教職実践演習」において、教育実習からの気づきを踏まえ、小学校英語授業の課題と目指すべき方向性について検討した学生の学びの内実を探究しつつ、今後の小学校英語授業についても考察してきた。

英語教育について蓄積の少ない学生たちの経験は、教科別グループ討議という形態を通じて収集され、比較考量されたことにより活性化し、相互検討を通じてシナジー効果が生出することで、授業構想力や指導力につながる新たな知見の獲得に結実することが確認された。また、小学校英語授業の課題や実践的示唆も共有された。コミュニケーションには目的があり、相手や他者そして場面や状況が

存在する。また、相手や他者の背景には多様な文化や価値観、考え方がある。話し手はそれらを尊重しながら自分の気持ちや意図を丁寧に伝え、また相手から発せられるメッセージも理解しようと努めながら積極的に聞く姿勢が大切である。演習により、学生たちはコミュニケーションにとって重要な諸点に気づき、授業づくりに努力を傾けようとする意識の向上につながったといえる。本稿では、学生の学びの具体を披歴することにより、教育実習経験の蒐集と省察を通して新たな価値を添加し、教職に就く者としての準備を重ねていく過程の一端を明らかにすることができた。

今後は、授業案を学校現場での各自の実践から検証することが課題となる。学生たちが教職に就いて以降、理想と現実や理論と実践の乖離を実感するかもしれないが、より良い授業を目指し、教員研修・現職研修を含め、研鑽を積み続けることを期待する。

註

1) 設定された4教科の内訳は、2023年度は国語・算数・英語・音楽、2024年度は国語・算数・英語・美術である。

付記

学生から質的データ提供の同意を得ていることを付記し、協力に謝意を表する。

引用・参考文献

- 安達理恵 (2022) 「CLILとLapbook (ラップブック) 指導による小学校外国語指導法授業の学生への影響」『中部地区英語教育学会紀要』51, 173-178.
- 卯城祐司編著 (2018) 『初等外国語教育』ミネルヴァ書房.
- 金森強編著 (2019) 『小学校英語科教育法—理論と実践—』成美堂.
- 小柴和香 (2021) 「小学校教員養成過程における英語力育成プログラム構築に関する基礎研究—視覚教材を使用したティーチャートーク力に焦点を当てて—」四天王寺大学紀要, 69, 127-143.
- 笹島茂編著 (2011) 『CLIL 新しい発想の授業』三修社.
- 笹島茂・山野有紀 (2019) 『学びをつなぐ小学校外国語教育のCLIL実践』三修社.
- 寺沢拓敬 (2021) 「現代社会における英語」酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一編著『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』三省堂, pp.141-153.
- 東京書籍株式会社 (2021) *NEW HORIZON Elementary English course 5*.
- 文部科学省 (2017a) 参考資料3 教員養成・研修 外国語 (英語) コア・カリキュラム【ダイジェスト版】(mext.go.jp) (2023年2月13日アクセス確認)
- 文部科学省 (2017b) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編』
- 文部科学省 (2018) 「今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm
- 安野寿美・高草木尚子 (2022) 「あれから1年、「3観点評価」で見えてきたことは？」『新英語教育』5, 6-9.
- 渡部良典・池田真・和泉真一 (2011) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦第1巻原理と方法』上智大学出版.
- Byram, M. (2021) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence: Revisited*. Multilingual Matters.
- Mehisto, P., arsh, D. & Frigols, M.J. (2009) *Uncovering CLIL: Content and Language Integrated Learning in Bilingual and Multilingual Education*. Macmillan.